

誰のために使われる

先日、ある政治家の方から次のような話をお聞きした。

超高齢の方が高齢者施設に入っていた。重い認知症になっていたので、入ってくる年金は施設費などを除いて、ほとんどそのまま預金通帳に貯まっていた。この方が亡くなった。そして、それまでほとんど施設に來なかつた子どもがやってきて、この高齢者の預金を持ち帰った。しかし、この方のお骨は置いたままであったという。

ひどい話だと思つ。ただ、こうしたケースはあちこちの施設で当

元重 伊藤

機構大教授 伊藤元重  
大東大 伊藤元重  
東大 伊藤元重  
研究 伊藤元重  
合 伊藤元重  
理 伊藤元重

たり前のように起きていると言  
う。また例外的なことなので話題  
になっているのだと考へたいが、  
この辺りは高齢者施設で働いてい  
る人たちの話をじっくり聞いてみ  
る必要があるのかもしれない。ど  
うも恐ろしいことが現場では起き  
ているようだ。

この話を聞いていて思ったの  
渡すのも、すべていけないとい

高齢者起点の年金制度必要

は、私たちの支払う社会保険料で  
賄われている年金は、誰のために  
使われているのだろうか、とい  
う疑問だ。高齢者のために使われ  
ているのであれば納得はいくが、  
お骨も持ち帰らないような親不  
孝な子どもにあげるために払っ  
ていると考へたら腹がたつてく

ものではない。  
ただ、年金財政が逼迫している  
現在、そうした悠長なことは言  
ていられない。年金は高齢者の生  
活に使われるのが基本であつて、  
そのための制度設計をきざつと考  
える時期に來ている。  
一般論で言えば、現物支給より

もお金での支給の方が好ましい面  
がある。お金でもらえば、高齢者  
が自らの意思で自分の好むところ  
に使えからだ。しかし、明らか  
に高齢者のためになつた年金の使  
われ方がされていないケースが多  
い。ましてや認知症の高齢者はな  
おさらだ。

現物支給切り替えも

そこで、年金の利用の仕方を柔  
軟に考へて、一部を現物支給に切  
り替へることを検討してもよい。  
特に、行動の自由が制限されるこ  
との多い超高齢者の場合はなおさ  
らだ。年金の現金支給を減らして、  
その分、介護や医療などのサービ  
ス（施設サービス）を充実させる  
という道もあるだろう。  
日本の年金制度は、日本が超高  
齢社会になるといふことを前提と  
して作られたものではない。また、  
日本の家族制度が大きく変わり、  
核家族化や少子化が進んでいると  
いふことも前提となつていない。  
だから、冒頭で紹介したような理  
不尽なケースが多く出てくるの  
だ。  
核家族化と超高齢社会を前提と  
して、高齢者の方々がより質の高  
い生活を営むために、どのような  
年金制度に変えていったらよいの  
か、真剣に検討する必要がある。  
現役の時代に社会保険料を大引き  
され、それを引退後に年金として  
もらう。こうしたお金のやり取り  
の仕組みだけでは、超高齢社会を  
乗り切ることはできない。高齢者  
の生活を起点とした制度設計が必  
要である。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。